

かなめ 道徳教育の要を明確に

「道徳」公開授業を参観して

池田ビジネススクール
学院長 池田 繁美

指導要領に従った正しい授業

去る10月9日(木)に、北九州市立穴生小学校の「道徳」公開授業を参観させていただきました。文部科学省委嘱の「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」の研究発表会の一環として、同校の1～6年生までの各学年1クラスずつの「道徳」の授業を公開したものです。

同校では「命を大切に作る心をはぐくむ教育の推進に関する研究」に取り組み、その成果を公開授業と研究発表会で示されました。教職員の方々一人ひとりの並々ならぬ努力と教育に対する情熱を感じ、「道徳」の授業を重視されているようすがよく伝わってきました。

なお、どのような授業がなされたのかを知っていただく手がかりとして、同校が作成した「研究発表要録」にもとづき、各クラスの主題と、『小学校学習指導要領道徳編』に掲載されている各学年段階における「道徳の内容」を書き出してみます(内容項目番号は、平成10年改訂時の『小学校学習指導要領道徳編』によるものです)。

公開学級	主 題 名	内容項目 番 号	内 容
1年1組	やさしい きもちで	低学年 3 - (1)	身近な自然に親しみ、動植物に優しい気持ちで接する。
2年1組	ありがとうのこころ	低学年 2 - (4)	日ごろ世話になっている人々に感謝する。
3年1組	大切にされている命	中学年 3 - (2)	生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
4年1組	目標に向かって	中学年 1 - (3)	自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げ

			る。
5年2組	かけがえのない命	高学年 3 - (2)	生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。
6年1組	わかりあう心	高学年 4 - (8)	外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。

このような主題にそって、それぞれの学年で子どもたちの理解をうながしやすいように、資料の選択と活用、教師と生徒の対話、生徒同士の対話などの工夫がなされたのです。

そして、前掲の表にまとめたように、その授業内容は『小学校学習指導要領道徳編』に従い、その意味では申し分のない正しいものでした。

「道徳」の要とは

穴生小学校での「道徳」の公開授業の内容は、すでに表に示したように、「身近な自然に親しみ、動植物に優しい気持ちで接する」(1年生)ことであったり、「日ごろ世話になっている人々に感謝する」(2年生)ことであったり、「生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする」(3年生)、「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる」(4年生)、「外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める」(6年生)ことであったりです。

いずれも子どもたちのみならず、私たち大人でさえも身につけておかなければならない大切な心のあり方にちがいありません。

しかし、どうも欲ばりすぎて、焦点がぼやけているように思えてなりません。

なお、本年8月に改訂された『小学校学習指導要領道徳編』では、1年生および2年生で教えるべき「道徳の内容」には、まず大きく次の4つが示されています。

1. 主として自分自身に関すること
2. 主として他の人とのかかわりに関すること
3. 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
4. 主として集団や社会とのかかわりに関すること

そして、さらにそれぞれ3ないし5の項目があり、合計で16の項目数です。3、4年生では18項目に増え、5、6年生では22項目にものぼります。

年間わずか34～35時間で、これらのことを子どもたちにいったいどこまで伝えることができるでしょうか。1時間や2時間で、「身近な自然に親しみ、動植物に優しい気持ちで接する」ことや「日ごろ世話になっている人々に感謝する」ことを教えるのは、とてもむずかしいように思えます。気づきを与え、意識づけをする程度なら可能でしょうが、それらを行動に結びつけ、しっかりと身につけさせるには多くの時間が必要になるはずで

ところで、「道徳」の「徳」とは、人に対する思いやりのことです。もう少し噛みくだいて言うなら、人に不快さを与えない、さらには安心と喜びを与えることです。それは、変なクセのついていない心から生みだされます。「クセのない心」とは、「素直な心」です。

つまり、人に対する思いやりや、素直な心のあり方を教えない道徳の授業は、ありえないといってもよいのではないのでしょうか。

たしかに、「身近な自然に親しむ」ことも、「生命の尊さを感じ取る」ことも、また「日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める」ことも大切でしょう。

けれども、もっとも要となる「人に対する思いやり」を教えることに多くの時間を割くべきだと考えます。そこに「道徳」の授業の意義があります。限られた授業時間数のなかでは、「道徳」の本質である「人に対する思いやり」にポイントをしぼって指導していくことが求められるはずで

また、今回聴講させていただいた研究発表会では、「道徳を教える教師の人間形成」についてまったく触れられなかったことにも疑問が残りました。

同校は「子どもたちが『よりよい自分』に出会う楽しい道徳の時間の創造」というテーマでの研究がなされていたのですが、その大もとは、やはり「教師の人格」です。「道徳を教える教師の人格をいかに形成するのか」という課題を抜きにしては、道徳教育の充実をはかることはできないでしょう。これは、決して穴生小学校だけの問題ではないはずで

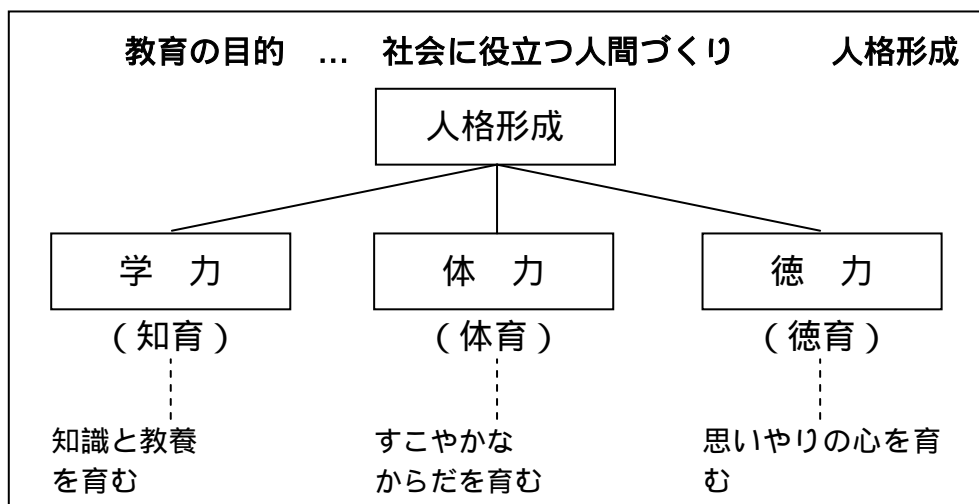
「道徳」の本質は「人に対する思いやり」であること、そしてそれを教える側の育成をはかる必要性があること。それらを明確にすることから、新しい「徳育」が始まるにちがいありません。

「徳育」を疎かにしてはならない

池田ビジネススクール
学院長 池田 繁美

学校教育の目的

学校教育の目的は、教育基本法の第一条に「教育は、人格の完成を目ざし、社会の形成者としてふさわしい心身の育成を期すべきところにある」とうたわれているように「社会に役立つ人間づくり」です。それは「人格教育」といってもよいでしょう。正しい人格を形成するためには、知育、体育、徳育の三つがバランスよくなされなければなりません。それぞれ、学力（知識と教養）、体力（すこやかなからだ）、徳力（思いやりの心）を育みます。



学校教育の問題点

いまの学校教育の問題点は、「学力」「体力」に重点が置かれすぎて、「徳力」の育成が片手間にしかなされていないことです。そのひずみが、さまざまな社会問題や人生のトラブルを引き起こしているように思えてなりません。

私たちは、まわりの人や社会、自然にかこまれて生きています。

人に対しては、相手をうやまい、不快さを与えない「礼儀」、ほどよい関係を保つ「節度」。それを心得ていないと、人間関係がくずれてしまい、「いじめ」の問題や極度の精神的ストレスをかかえ込んでしまいます。

社会のなかでは、他人に迷惑をかけないように心がける「公共性」や、ものごとの基準とすべきしっかりとした「規範意識」を持つこと。そうでなければ、社会の秩序をうまく保つことができません。毎日のように報道されるいたまし

い事件、くり返される企業の違法行為、職につくことのできない若者（いわゆるニート）の増加も、公共性や規範意識の薄れとは無関係ではないでしょう。

また、自然環境に対しての配慮も忘れてはなりません。地球温暖化や資源の枯渇現象も、そこに原因を求めることができます。

対象	指 導	結 果	社会問題
人 間	礼儀 節度	人間関係 良好	いじめ・ひきこもり・自殺・ うつ病
社 会	公共性 規範意識	社会秩序 保持	違法行為・ 若年失業（ニート）
自 然	環境保全	自然環境 保護	温暖化 資源枯渇

教師の養成機関の必要性

現在の学校教育の「徳育」におけるもうひとつの問題点は、それを教える人を育てていない、ということです。教員は、算数や英語などの学科、あるいはそれらに関する指導技術などは学びますが、こと「徳育」に関しては一応の指導要領は示されるものの、あとは各人の技量にまかされているだけではないでしょうか。

一般的に言って、大学を卒業したばかりの若い人たちに、いくら相手が子どもだからとしても「人格の完成を目ざし、社会の形成者としてふさわしい心身の育成を期す」教えをまかせることは少々乱暴なような気がします。

なお、「教育とは、教える側の人格を相手に移しかえることだ」と言われています。

ふつうの企業では、ベテランの管理者がその役割につき、「卒業したばかりの若い人たち」（新入社員）の教育指導にあたっています。新入社員がいきなり「現場」を担当するということは、基本的にありません（私どものビジネススクールの新人インストラクターも、一定期間の研修を終えたあと、先輩社員の補佐としてはじめて受講されるかたの指導にあたります）。もちろん、教職につく人たちは、企業に就職する人とはちがってそれにふさわしい勉強はしているでしょうが、まえに述べたように「人格の完成」を目ざすための学びはおこなわれていないはずです。

なお、以前に教師としての自信をなくした人から、ご相談を受けたことがあります。そのかたは、こう言っておられました。

「いきなり教壇に立たされた感じで、子どもたちをどう指導していいのかがわからなくなりました。また、親からの苦情にも、どのように対処してよいのかわからず頭をかかえ込みました」

人生においても仕事においても経験が少なく、また教職課程で学んだ知識や技術論だけで教壇に立つことは、高速道路を運転する若葉マークをつけたばかりのドライバーと同じでたいへんに危なっかしい状態でしょう。

税理士でも三年の実務経験がなければ、いくら試験に合格していても、それを仕事にする資格が与えられません。

したがって、教育の現場に出るまえに、新卒の教師たち自身が「徳育」を学び、また子どもたちへの指導方法をも習得できる養成機関が必要だと思えます。

「得」から「徳」へ

戦前のわが国の教育は、所属する集団のルールにしたがい、目上の人をうやまうことが大切だと教えていました。それは正しい理屈なのですが、あまりに行き過ぎて、国家や天皇に服従となり、戦争に走ったといえるでしょう。知育、体育、特に徳育の基準は「国家」にありました。「思いやり」の対象は「国家」だったようです。

なお、戦後は、アメリカ合衆国の占領下で「国家よりも個人、服従よりも自由」という精神が国民に植えつけられていきます。

自由に競争して他者に勝つ。自分の利益を優先する。

そうした思いが、わが国の経済を発展させ、人びとの生活を豊かにしてきました。

ところが現在は、戦争もなく平和な世のなかであるはずなのに、社会生活にさまざまな混乱が生じてきています。ある意味で、「乱世」といってもよいでしょう。

これは「思いやり」(徳)よりも、「個人の利益」(得)を優先させた結果かもしれません。「知・『得』・体」の教育がなされてきた、というのは言い過ぎでしょうか。

また、私たち現代の日本人は、先人たちが苦勞して^⑤遺してきた文化や財産のおかげで豊かに暮らしてきました。さんざんそれらを食いつぶして、多くの人びとがあとは知らん顔して立ち去ろうとしているかのように見えます。

これからの時代には、「自立」と「調和」の精神を育てていかなければならないでしょう。自立をするためには、「学力」と「体力」が必要です。そして「学力」と「体力」を生かし、まわりの人びとや社会、自然界と調和するには「徳力」が欠かせないのです。

他人と競争し、個人の利益を第一とする「得」の考えではなく、自立した個人がしっかりと手をつなぎ合って協調し合うための「徳」の精神を学ばなければならない時代が来ています。

教育の変遷

	(戦前) 過去	(戦後) 現在	未来
基本精神	国家・服従	個人・自由	自立・調和
世情	戦争	乱世	平和
教育要素	知・国・体	知・得・体	知・徳・体

池田ビジネスでの「徳育」の実践

- ・ 社会人のための人格教育(徳育)を 14 年前から実施。
- ・ 学校教師との「徳育に関わる勉強会」を 3 年前から実施。
- ・ 社会人と学校教師のための人格形成の場を今年 9 月 1 日に建設。
- ・ 子どものための道徳教科書を作成中。

<参考>

「徳」の文字。

その原字は恵(とく)と書き、「心+直」の会意文字で「本性のままのすなおな心の意。徳はのち、それに^{てき}印を加えて、すなおな本性(良心)に基づく行いを示したもの」です。 [『漢字源』(学研)より]

つまり「徳」という字は「素直な心」そのもの、あるいは「素直な心(良心)に従った行為」をさします。それを私は「思いやり」と定義しています。